

ことしも現場からのリアルな報告が、
あすの実践を元気づける！

伊丸岡 圭一

一 はじめに

今年度の書教育分科会は、初日四名、二日目五名という少数であった。また、レポート五本のすべてが高校教員であり、市民の参加者としては学童保育指導員の方が一名であった。

小中学校の現場がどうなっているのか、保護者や地域の方が書写書教育にどのような期待をいただいているのかを、もつと知りたい。積年の課題でもある。

ただ、少ないながらも、今年のレポートからは、書のみならず、子どもや教育、社会の現状があぶり出され、これからの取り組みのヒントが得られたように思う。

二 各レポートから

(1) いまどきの高校生の

「手軽な同調アイテム」

初日のみの参加であった音更高・野坂氏は、近隣の小学校の校内研修に招かれ、書写の指導法を披露したという報告。新指導要領による新教科書では、初めて「小筆」の使い方が



独立した単元で掲載された。ところが、大筆で大書する作品本体の文字が「一」や「二」、「人」「力」などなのに、いきなり小筆で名前を書けるか？小学校の先生の中には、児童の名前をパソコンの毛筆フォントで印字して手本として渡す先生が多いという。

また、今年度一年生を担当した氏は、「希薄な人間関係」と

「手軽な同調アイテム」とのキーワードで、いまだきの高校生像をあぶり出してみせる。すなわち、四月以降、学年生徒間のトラブルは、『キモイ』と言った」というのが発端であったというのだ。社会に対し、勉強に対し、あらゆることに関心が無く、ただ軽薄に「ねえねえ、あの子キモイよね」の一言が発せられ、また、同調される。「同質」を求めるネットの「2チャンネル」等同様、「キモイ」の一言が、自分たちの「連帯感」を生み出し、手軽な同調アイテムとなっているのである。

このことから、氏は、社会情勢や背景を分析することは、教員として必要であり、押さえながら実践することが大事だというまとめであった。

(2) 二年目の「もやもや」

苦小牧西高・磯角氏は異動して二年目の実践を「二年目の『もやもや』と題してレポートした。



「もやもや」とはいいながら、三年間で四単位を履修できるカリキュラムの中で、線質や運筆リズムの基礎学習から、見学旅行と絡めた平和学習単元、卒業作品など多彩な展開がされ、校内展示も旺盛に行われている。

その中で特に目を引くのは、「卒業記念 高校生活」と題する三年生の単元である。一頁四方の鳥の子ロール紙に、三々四人のグループによる合作で、生徒は「積極的に取り組み、楽しんでいた」。また、「未来絵日記 自分への手紙」では、十年後の自分の姿を想像して絵日記を書かせ、それを元に未来の自分への手紙を作品化して、絵日記、作品ともに封入する。楽しみながら積極的に取り組む生徒が多かったという。さらに、「自我書作品」では、自分を題材にした作文をしながら、自分を表現するということで、「私は」で始まる短文を二十近くも連記させ、そこから作品に用いる撰文へと繋げてゆく手法で、参考になるところが多い報告であった。

氏は、教材開発について、また、音楽との選択における人数調整について悩んでおられたようだ。「教材を通して子どもを育てるつもりが、教材をこなすことが授業の目的になっている子どもがいるように感じられる」。また、「発達障害」をもつ生徒がおり、「かたまつてしまう」とき、どんな対応をしたらよいのか「もやもや」感を拭えない。非常に繊細な、生徒思いの氏の一面である。

(3) ベテランの一言

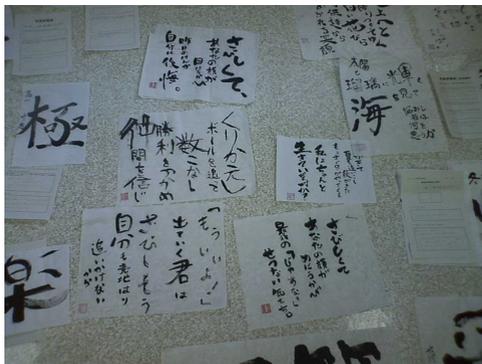
北見緑陵高・森田氏は、

書の授業を持つようになって四年目。書道専任教員転出後の後任者が、国語の免許しかなく困っていたときに、自身も免許外でありながら、書道を担当することになった。すでに一年生から教えた生徒も卒業し、自分なりのやり方が定着してきたという。たいへん頭の下がる実践であるという想いと同時に、氏からは、とても大切なことを考えさせられる発言があった。

「学校が楽しいなんて、バカな大人が、いまもつと大変な大人社会に在って、学校時代に苦しかったことをすっぱり忘れ去って懐かしんだ学校像に過ぎない」。

「自分とは何者か、将来は不安だらけ、というのが本来の高校生」。

「わからないことがあるから、知らないことがあるから、出



来ないことがあるから、少しでもわかる、出来るようになるために学校に来るんだ。だから授業なんて本来『楽しい』ものなんかではない。楽しいとか楽しくないとか言うレベルの話ではなく、クリアしなければならぬもの、というのが氏の真意であつたらう(磯角氏のまとめ引用)。

ベテランの断言に、教育の本質を鋭く突かれた思いでいっぱいであつた。

(4) 悩み尽きせぬ青年教師

一方、札幌東陵高・小笠原氏からは「今年の自分と授業作品」と題して、自身の近況や感想、生徒の実態や授業の工夫について、飾らない言葉で、淡々とレポートしていただいた。

「進学実績」に生き残りを懸ける札幌市内校のどこにでもありそうな現場の状況。本来的ではないとの思いと現実との狭間で、時に苦悩する。これでいいのか。生徒の現状、社会の在りよう、教育、就中、目の前の現場、職場の実態・・・とことんまじめな氏だけに、生徒も、「先生だつていじめはなくせない



って思ってるんでしょ？」と本質に迫ってくる。上辺だけのつきあいでは、生徒にそこまで言わせられないのではないだろうか。

「生きづらさ」のは子ども達（生徒）も大人達（教師達）も同じという時代。だがしかし、だからといって、ともに嘆きあい、諦めあっているというわけにもいかない。非常に良心的な青年教師の姿がここにある。

(5) 複雑な教育課程の中で

それに比べて脳天気なのは東川高・伊丸岡（筆者）の報告である。

今回も、下の句カルタの「木札（取り札）」の教材化の試みの報告である。勤務校では、一月下旬に全校カルタ大会が開催される。今度で第31回という伝統的生徒会行事。もちろん北海道特有の下の句カルタである。一年生の宿泊研修でも行われ、12月には生徒の

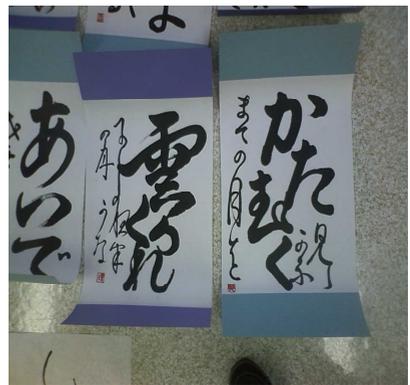


「読み手」育成も行われる。筆者はもう20年以上も前から、この「取り札」

の作品化を授業にて行ってきた。一昨年現任校に転任してからは、この作品をカルタ大会会場に展示して好評を得た。半切1/3判への臨書作品と、半紙作品を画用紙に転写

した「紙刻字」作品である。この取り札の「元版」は、現在多く流通している任天堂版を使っているが、当然のことながら生徒はそうやすやすとは読めない、書けない。そこでこの取り札「臨書」のためのテキストをつくろうと試みたのが今回のレポートで、ようやく一〇〇枚の完成にこぎつけた。

前任校時代にも、**地域教材**、**学園教材**の収集、詩文集制作に力を入れてきたので、今後も少しずつ何かしらを形にしてゆきたいと願っている。これはとりもなおさず、生徒の真の意味での地域愛、母校愛の育成につながると思うからである。これらは二〇〇八年版、および昨年二〇一二年版の『北海道の教育』にも記載したので参照されたい。



三 おわりにく討論のまとめと今後の課題

子ども達が「きょう何やるの？」と、目を輝かせて教室に入ってくる・・・これは東川の生徒の日常である。

学校にとって、生徒たちにとって、書の授業が充実している、楽しい、必要だ、という声が多くなる仕掛けを私たちは工夫しなければならぬ。それは何も展覧会入賞の多寡ばかりではない。どんな様子の学校で、どんな日々の取り組みがなされているだろうか、ということに尽きる。

臨書、創作

それぞれの仕事で生かされる生徒があり、活きる生徒がいる。社会の風潮が教育現場の現状や課題を形成している。子



どもたちの人間関係の希薄化。教職員同士の人間関係の希薄化。親の要求の先鋭化。特定の場所や学校で起きているわけではなく、普遍化し、顕在化してきている。だから、特定の教師の悩むべき問題ではない。

子ども達にとつての「学校の楽しさ」とは何か。

ハンディを持った子。発達障害のある子。この子達もやはり「特殊」なのではなく、「普遍」であり「顕在」なのであり、この子たちともどの子たちとも、どう向き合い、学びへと誘うか、書教育としてどんなアプローチの仕方があるのか、今後の課題ではなかるうか、というまとめで二日間の分科会討論の幕を閉じた。

(東川高校)